

## 徹底した問診，共感により，患者さんに笑顔を

医療法人社団志晴 富田呼吸器アレルギー内科医院理事長・院長 富田 和宏

### 喘息の経験が将来の決め手に

私は幼少の頃から、重い小児喘息を患っていました。発作が起きると、病床からじっと天井を眺めては「なぜ自分は喘息になったのか」「なぜこんな苦しい思いをしなければいけないのか」と嘆いていたことを思い出します。

当時の喘息治療は現在のものと異なり、吸入ステロイド薬はまだ普及しておらず、エビデンスに乏しく、体質改善のためと、古典的な減感作療法や乾布摩擦などの民間療法に励む毎日でした。そして、小学生になると、「発作の苦しさから開放されたい」「発作が起こる理由を知りたい」という思いから、将来は医師になることを決心していました。

実家はもともと、祖父まで7代続いた医師の家系でした。その祖父は金沢大学在学中、突然法医学の勉強をすと言い出し、田畑をすべて売って北海道大学に入学したと聞いています。その後、法医学博士となり、伊達赤十字病院の副院長を務めました。後に糖尿病を発症、高額だったインシュリン代を捻出できず37歳で亡くなったそうです。

私の父は、幼少期こそ裕福だったものの、祖父の死後は苦労を重ね、夜間高校から北海道大学農学部に進学、岐阜大学農学部で教授となりました。祖父、父の経歴を知っている私は、どこか頭の片隅に、富田家の医師を復活させたいという考えがあったのかもしれません。

### 苦労も経験して、念願の呼吸器内科医に

そうは言っても、医師になるまでの道のりは決して順調ではありませんでした。小学生時代は発作で授業を欠席しても、成績には影響することはありませんでしたが、中学生になると授業のスピードも速くなり、しだいに周囲から遅れを取るようになります。満点が取れて当然だったのが、平均点すら取れない。「勉強で結果を出さないと、医師になれない。医師になれなければ、何の取柄もない人間になってしまう！」と、1日3～4時間の睡眠で、がむしゃらに勉強に励みました。

それでも、大学は現役不合格でした。父からは「絶対現役合格」と言い渡されていたため、不合格が確定した3月15日、父に土下座で浪人を頼みこみ願うべく、その足ですぐにアルバイトを始め、何とか4月までに予備校代を工面しました。

浪人中は、偏差値を50台後半から70台まで上げ、1986年に千葉大医学部に合格、卒業後は同大附属病院呼吸器内科に入局しました。それから総合病院で数年間、呼吸器内科の臨床を行った後、千葉大医学部の大学院に進み、4年間の基礎研究を経て博士号を取得しています。大学院では、T細胞のシグナル伝達経路における JAK キナーゼの役割をおもなテーマとして、新薬開発につながる先進的な研究に携わることができました。今なお、海外の最新知見を文献で得ることが苦でなく、それらの情報を患者さんにフィードバックできているのは、大学院時代の経験が多いに役立っている

と思います。

### 長年思い描いた、理想の診療空間を実現

2003年に聖隷浜松病院呼吸器内科主任医長に就任すると、診療以外に割く時間が徐々に増えてきました。また、呼吸器内科が対象とする疾患は多彩で、病棟でがん患者を診ることは、医師としてやり甲斐がある反面、喘息をはじめとするアレルギー疾患を診たい私にとって菌がゆい状況でもありました。

「喘息に特化した診療を手がけたい」という思いが日に日に強まる中、病院の同僚医師がコンサルタントのサポートを得て開業すると言うのを聞き突如、開業という選択肢が浮上し、とりあえず話だけでも聞こうとコンサルタントに会いに行きました。すると、ビル診という私の構想に対し、そのコンサルタントは「浜松は車社会なので良好なアクセスと広い駐車場が必要」と提言するので、ちょうど、聖隷浜松病院の近くに条件の良い物件が空いており、加速度的に開業への道が開けていきました。その日から約一年半後の2014年、「富田呼吸器アレルギー内科医院」を開業しました。

開業するにあたり、重視したのは院内の動線です。効率よく診療が行えるよう、点滴、ネブライザー、心電図を取る部屋はすべて一直線に配備し、患者さんが急変した場合はストレッチャーに乗せ、ほかの患者さんの目に触れることなく非常口から救急車に搬入できる流れとしました。また、玄関脇には感染症患者専用室を設置、インフルエンザなどで発熱した患者さんはインターフォンを押してもらい、他の患者と接触することなく診察できるようにしました。

待合室にもこだわりを詰めました。雑誌新聞を触ることで患者さんの手が不衛生にならないよう、読み物は持ち帰り可能な資材のみとしました。テ

レビは常時、健康番組の録画を流し、待ち時間は健康意識を高める時間としました。

理想的な場所、空間の中で、喘息に集中できる診療を行う。幼少期に思い描いていた将来を現実のものとして、「やっと自分の居場所をつくることができた」と、大きな充実感、幸福感を得ています。

### 1時間16名に対応できる体制を実現

現在、喘息・咳喘息を中心に多くの患者さんが受診し、開業5年目で初診患者は1万人を突破しました。今日は午前中だけで50名、昨日は約90名の患者さんを診察しました。これだけ多くの受診者を診るため、当院ではさまざまな工夫を重ねています。

まず、診療は完全予約制とし、翌日受診予定の患者さんについて、看護師、受付スタッフ全員が各々予習を行います。病名、治療方針、検査内容について把握し、ミス無く円滑に診察を進めるための準備です。私も朝6時頃には自宅を出て、診療までの2時間、昼休みの1時間を予習に費やしています。

そして診察時には、患者さんに「去年の今頃、衣替えの時期に咳が出ていましたね」などと、さり気なく伝えます。すると患者さんは、自分でも忘れていたできごとと思い出し、「まるで先生が日記を付けてくれているかのよう」と喜ばれます。そして、自分の症状が細かく把握されていることに、多いに安心されるようです。

また、4名いる医療秘書のうち、1名はおもに診察補助を担当し、もう1名は受付と診察室の状況をみて、患者さんをうまく誘導してくれます。

このように、徹底して非効率な作業を省くことで、患者さんの待ち時間は長くても30分、ときに0分もあり得ます。日中は慌ただしいものの、診療

は時間内には終了、スタッフが遅くまで残ることはありません。季節的に患者さんが増えてもコントロール可能で、以前は1時間で診る患者さんは最大14名でしたが、現在では16名まで可能となっています。

### 慌ただしい中でも、質の高い診療を

多くの患者さんを診る中でも、診断において重視しているのは、詳細な問診です。呼吸器はとりわけ問診で診断が得やすい領域であり、徹底して問診を行えば、おのずと病気は見えてくるからです。

当院では看護師が予診を取り、診察時にはその内容を確認しながら、あらためて私が問診を行います。患者さんの訴える部位以外に鼻から喉、肺まで見落としなく確認を行い、あらゆる角度から鑑別を考えます。正しい診断により適切な治療につながれば、当然ながらより良い効果を生み出します。そして、患者さんの信頼獲得につながるのです。日々、どんなに慌ただしい中でも、徹底した問診は正しい診断への近道と考え、けっして疎かにはしていません。

また、喘息の治療においては、吸入指導がその効果を左右します。正しい手技と確実な吸入が重要ですが、吸入薬は種類が豊富で、デバイスごとに手順が異なります。そのため、高齢の患者さんでは、戸惑う方が多いのも現状です。

そこで当院では、院外調剤を担う薬局の協力を得て、吸入指導専門のブースを設け、当院の患者さんを対象に吸入指導を提供してもらっています。うまく吸入できない患者さんがいれば、当日中にファックスが来て、次回受診時に再確認を行います。このような連携は、吸入時の問題点や、デバイス変更の必要性を把握しやすく、治療効果の改善に大いに役立っています。

また、地域において、病院との連携も欠かせません。当院から病院への紹介事例として多いのは、がん、間質性肺炎の疑いや、入院加療が必要な喘息などです。ほかにも、患者さんがセカンドオピニオンを得ることを目的として、病院を紹介する場合もあります。喘息治療では現在、生物学的製剤が臨床使用可能ですが、治療効果が期待できても、経済面から躊躇される患者さんは少なくありません。大きな病院で適応があると判断してもらえれば、治療を踏み出す安心材料になると考え、積極的に病院受診を勧めています。

### 質の高い医療プラス共感で 患者さんを幸せに

重い小児喘息の経験をきっかけに医師をめざした私ですが、喘息以外にも、さまざまなアレルギー症状を持っています。ですから、患者さんが診察室で訴える「胸がかゆい」「喉がイガイガする」「息をいくら吸っても足りない」などという表現は、自分自身の経験として、共感することができます。

そうした訴えに対し、私の返す言葉は、おのずと患者さんの悩み、苦しみに寄り添っているのかもしれません。あるとき、喘息の患者さんがふと、「先生、治療を受けて楽になりました」と言うので、「それは良かったね、うれしいよ!」と返したところ、「医師に嬉しいと言われたのは初めて」と顔をほころばせるのです。私は、心の底からそう思ったわけですが、そのとき「患者さんの辛さに共感できるのは、自分の強みかもしれない」と気づきました。

ですから、呼吸器疾患の中でも、喘息などのアレルギー疾患を診ることは、大きなやりがいを感じます。苦しんでいた患者さんが、治療により健康な人と何ら変わらないと生活を送れるようになり、徐々に元気になる姿をみるのは、医師として

大変幸せなことです。

5年前に開業したときの目標は、「地域で一番信頼されるクリニックになる」でした。その目標に向かって、問診と鑑別を徹底し、医師として患者さんの気持ちに共感し、個々に寄り添う診療を行ってきました。そんな私に信頼を寄せてくれる患者さんを1人でも多く診るべく、スタッフや地域の協力を得て、さらにクリニックの体制を強固なものとしていきたいですね。

最近、家族に「50歳代はこのまま走り続けて、60歳になったらちょっとゆっくりしようかな」と話したところ、「それは絶対、無いでしょう」と一笑に付されました。私自身も、明日明後日、来年、そしてその先もスタイルを変えることなく、開業時の目標に向かって診療を続けていきたいと思っています。